中国における儒教の復権

——「よみがえる孔子、21世紀の中国の知恵」制作を中心に

渡邉　義浩・蔣　樂　群

はじめに

大学における人文学の研究成果をテレビ番組に反映させることは、従来、あまり高く評価されることではなかった。研究上の正しさと番組上のおもしろさが両立し得ないと考えられていたからである。大東文化大学において後漢・三国時代の歴史を研究している渡邉義浩は、ＮＨＫの海外番組の制作にディレクターなどの立場から長年関わってきた蔣樂群との連携により、これまでいくつかのテレビ番組を制作してきた(1)。本稿は、2000年12月３日に、ＮＨＫ-ＢＳ１で放映された「よみがえる孔子——21世紀を生きる中国人の知恵」の制作によって実感された中国における儒教の復権について論じるものである。

一、孔子祭祀の展開と文化大革命

儒教の祖である孔子は、その死後まもなく生国である魯で廟が作られ、漢初までは国家との関係を有さず祭祀が続けられてきた(2)。前漢の高祖劉邦が、孔子廟を訪れたのは、高祖の十二（前195）年、その死の一年前のことであるという（『漢書』巻一下 高帝紀下）。これ以後、前漢の皇帝が孔子廟を訪れた記録はない。前漢時代には「儒教国家」が未成立であったことの一証左となろう。孔子の子孫である孔霸が「褒成君」に封建されたのは、元帝の初元元（前48）年である(3)。その際、祭祀の費用は孔霸の食邑から負担するものとされ、国家が孔子廟の祭費を拠出することはなかった（『漢書』巻八十一 孔光傳）。これに対して、「儒教国家」の形成される後漢時代においては、皇帝親

祭による孔子廟の祭祀が開始され、以後「釋奠」と称されて歴代王朝に受け継がれていく、孔子廟祭祀が確立するのである[4]。

後漢王朝を創設した光武帝は、建武五（29）年に魯に御幸し、大司空に孔子を祀らせた（『後漢書』本紀一上 光武帝紀上）。それとともに光武帝は、王莽とともに滅んだ褒成侯を復興し（『後漢書』列傳六十九上 儒林上 孔僖傳）、建武三十二（56）年に挙行した封禪に褒成侯を参加させた（『續漢書』志七 祭祀上）。また、明帝は、『續漢書』志四　禮儀上に、

> 明帝の永平二年三月、上 始めて羣臣を帥ゐて躬づから三老・五更を辟雍に養ひ、大射の禮を行ふ。郡・縣・道をして鄉飲酒を學校に行ひ、皆 聖師の周公・孔子を祀らしむるに、牲は犬を以てす。是に於て七郊・禮學・三雍の義 備はれり。

とあるように、周公と孔子を學校で祭らせた[5]。「聖師」として孔子を学校で祭る釋奠が、歴史的事実として行われた最初の記録である。さらに明帝は、永平十五（72）年には自ら孔子の旧宅を訪問し、孔子と72人の弟子を祀り、親しく講堂に臨んで皇太子・諸王に経を説かせた（『後漢書』本紀二 明帝紀）。

白虎觀会議を主宰して、「儒教国家」の教義を確立した章帝に至ると、孔子廟の祭祀は、さらに盛大に挙行された。章帝自らが太牢によって孔子を祀るのみならず、孔子の末裔の男子63人と会見して、孔子の宗族を顕彰したのである（『後漢書』列傳六十九上 儒林上 孔僖傳）。こうして章帝は、「儒教国家」として完成された後漢国家の祭祀の一環として、孔子廟の親祭を行い、これを天下に示したのである。

三国曹魏の斉王曹芳は、正始七（246）年、太常に命じて釋奠を行わせ、太牢によって孔子を中央官学に祭り、顔回を配享した（『文獻通考』巻四十三 學校考四）。72名の弟子の中から、顔回を抜擢して孔子に添え合わせ祭ったのである。その後、西晉の武帝は、泰始三（267）年、皇太子に太學で講経を行わせ、親しく釋奠をさせたが、その儀礼は曹魏の方法を継承した。東晉においても、皇帝自身、あるいは皇太子の釋奠は続けられ、南北朝でも、西晉の故事に従って、この儀礼が行われたという[6]。

唐の高祖は、西晉から隋までの故事を改め、周公を先聖として孔子を配享した（『唐書』巻十五 礼楽志）。しかし、太宗のとき、房元齢らの建議にもとづき、周公を祀ることを止め、孔子を先聖とし、顔回を配享とした。ところが、そののち高宗の永徽年間（650～655年）に再び周公を先聖とし、孔子を先師としたが、顯慶二（657）年、長孫無忌らの上奏により、孔子を先聖とすることが定まったのである[7]。

宋の太祖は、建隆年間（960～963年）に、三たび國子監に行幸して、文宣王廟（孔子廟）で釋奠を行った。眞宗は、大中祥符元（1008）年、曲阜に行幸して文宣王の墓を拝し、詔を下して孔子を元聖文宣とした（『文獻通考』巻四十三 學校考四）[8]。仁宗は、至和二（1055）年に、孔子の直系子孫を封建して衍聖公となし、これが清末まで変わることなく継承されていくのである[9]。

こうして清末まで孔子は国家による祭祀を受け続けてきた。しかし、20世紀における中国の「近代」化の中で孔子は打倒すべき封建時代の遺物と考えられるに至る。1919年の五四運動で叫ばれた「打倒孔家店（儒教を打倒せよ）」は、そうした孔子への批判を代表しよう[10]。1949年に中華人民共和国が成立しても、孔子が復権を果たすことはなく、ことに1966年に始まった文化大革命の時には、孔子は「頭号大混蛋（最大の大馬鹿者）」と呼ばれ、孔林をはじめとした文化遺産は破壊され、孔子の子孫も抑圧を受けた。

鄧小平による改革開放路線に基づき、経済建設を優先させた中国では、さまざまな社会問題が発生し、その原因は倫理性の欠如に求められている。また、世界規模での社会主義思想の退潮に伴い、中華民族を統合する思想的背景としても孔子の思想に注目が集まってきた。われわれは20世紀の終わりの年に、こうした孔子復活の気運をすくい取り、ＴＶ番組としてそれを日本に伝えようとしたのである。

二、孔子復活への胎動

ＴＶ番組の制作では、制作の方針が確定すると、主題を取り巻く人物や事

件を探し求める先行調査が行われる。蔣樂群の先行調査により、孔子復活への動向として集められた話題は、次の(一)～(六)であった。

(一)国際儒学連合会

当時、渡邉義浩と同僚であった東京大学名誉教授・大東文化大学教授溝口雄三は、1994年に北京の国際儒学連合会に出席し、そこに国家主席の江沢民が接見に現れたことを教えてくれた。これは、孔子の再評価のシグナルであろうと、その時に感じた。そこで蔣樂群は、2000年1月、国際儒学連合会の秘書長をつとめる姜広輝中国社会科学院歴史研究所研究員から取材を行うことにした。姜広輝によれば、「中国では10年以上前より、孔子およびその思想研究への重視が始まっており、1984年には北京で国務院副総理の谷牧を名誉会長、南京大学校長の匡亜明を会長として中国孔子基金会が成立した。そして、1994年10月、国際儒学連合会（International Confucian Association 略称：国際儒連、ICA）が、北京の人民大会堂において成立したのである[11]。そこには、中国・日本・韓国・米国・ドイツ・シンガポール・ヴェトナムなどの国および香港・台湾の儒学研究に関わりのある学術団体が共同発起人として参加した。成立大会には、国家主席の江沢民も出席し、溝口雄三など世界各国からやってきた儒学の専門家と会見した。現在、中央政府は、1000万人民元を出資して基金を設立し、国際儒学連合会を維持している」とのことであった。

このとき姜広輝は、国際儒学連合会の事務所で、多くの写真を見せてくれた。それらの中で最も興味深いものは、1989年10月に国家の指導者が儒学の研究者を接見する写真であった。1989年6月4日の第二次天安門事件から間もない時期なためである。この写真は、中国共産党がロシアや東欧のように、民主化により結果として社会主義を崩壊させる道を選択しない代わりに、これまで抑圧してきた儒教を国家統合の理念の一つとして用いようとの意志を示したことを証明するのである。現在、胡錦濤主席の提唱する「八栄八恥」と「和諧社会」のスローガンは、この方針転換の深化・延長と見ることがで

きる。つまり、1989年10月にこそ、中国共産党の儒教に対する方針の転換点を求めることができるのである。

(二)聖陶学校とその生徒

1989年に中国共産党が儒教を重視する政策に転換したことを受けて、1990年代には北京の文化人が、孔子の思想を教学の中心とした私立学校を開設することが多く見られた。なかでも、文化大革命で落命した著名な文学者老舎の息子である舒乙と、中国社会科学院宗教研究所の王志遠研究員たちが、北京で開いた聖陶学校は、その代表である。聖陶学校は、『論語』などの古典の教育により、中国の伝統文化を復興することを目的とする。

蔣樂群は、王志遠副校長と劉蔭芳校長に取材を行った。王志遠によれば、「聖陶学校では、国家が定めた九年間の義務教育課程のすべての内容を教育するが、それに加えて小学二、三年生には、『論語』の暗唱を課している。孝を中心として孔子の思想を教えることにより、人倫の基本を幼年期に養うためである。また、児童たちは学校に寄宿することを求められ、週末に帰省する。生活の基本習慣を確立するためである」という。学校の授業で孔子を教える場面を映像として用いれば、教育テレビや放送大学のような構えた形ではなく、孔子の思想を視聴者に自然に伝えることができる。この学校の生徒はどんな家庭の出身で、両親はなぜ幼い我が子を寄宿制の私立学校に入れるのか。長年の批判を受けてきた孔子とその思想を、学校が子供に教え込むことに、なぜ賛成するのか。生徒の家庭の生活により、これらの疑問に答えを得られるとよい。そこで、幾人かの生徒を紹介してもらい、生徒の視線から学校を描くことにした。

われわれが選んだ生徒は、８歳になったばかりであるが、比較的高い学力を持ち、上品で可愛らしい。両親は離婚しており、母はアメリカですでに新しい家庭を築いている。そのため生徒は、現在もと大学の職員であった外祖父母、叔父叔母と共に暮らしている。外祖父母は生徒が父母の離婚により両親と一緒の生活を早く失ってしまったことを傷む。祖母は、「両親の離婚に

より心に負った傷を少しでも癒すため、聖陶学校で寄宿生活をさせている。学校で孔子思想の教育を受け、学問や理性を身につけることにより、道理をわきまえた人間になって欲しい。そうすれば、きっと母親より優れた人間になってくれるはずである」と願っている。

聖陶学校は、中国共産党による儒教の復活を実践するための機関としての性格を持ちながら、一方で失われつつある中国人の血縁的紐帯の再建を担う教育機関としての役割をも果たそうとしている。孔子の思想は、決して政治的な秩序統制だけでも、知識学問といった文化的な伝統であるだけでもない。血縁や家庭における基本的秩序原理といった民族が育んできた潜在的な知恵なのである。中国人は、価値基準が多様化する現代において、自分の精神的拠り所を探し、その一つとして孔子の思想を求めているのである。

(三)孔子宗家の南北・中台問題

孔子の家系は「天下第一家」と称され、2500年以上も血統受け継いできた[12]。その間に二回、孔子の宗家は大きく分裂した。

一度目は、宋の建炎三（1129）年、孔子第48代の嫡長孫である衍聖公の孔端友が、高宗の勅命を奉じて揚州に南渡し、衢州に家を賜い廟を立て、「孔氏南宗」を形成した時である[13]。北宋が金に滅ぼされ、南遷した南宋に随従したのである。これに対して、弟の孔端操は曲阜に留まり、金から衍聖公を継ぐよう命ぜられ、「孔氏北宗」と称された。やがて、元により金・南宋が滅ぼされると、「孔氏南宗」は宗主の地位を「孔氏北宗」に譲った。しかし、その後も、衢州は孔氏の第二の故郷とされ、「東南闕里」と呼ばれた。蔣樂群が「孔氏南宗」の嫡長孫である孔祥楷より取材したところに依れば、孔祥楷は1947年に蔣介石の国民政府が孔子祭祀を挙行した際、わずか９歳で「大成至聖先師南宗奉祀官」を継いだ。毎月400銀元の俸禄であったという。しかし、中華人民共和国の成立後は、栄光を失った。孔祥楷は苦学を積み、1961年に西安建築科技大学を卒業し、河北金廠峪金鉱鉱長、沈陽黄金学院副院長を勤めた。最近になって、地方政府は孔祥楷に、観光事業促進と孔子文化高

揚のため沈陽より戻り、衢州市孔氏南宗家廟管理委員会の成立の準備をし、孔氏南宗家廟を復活させるよう依頼したという。今回の取材を機に、南北両宗が協力して孔子祭祀を行う可能性を孔祥楷に尋ねたところ、問題が山積しているため、今回はできないとのことであった。

二度目は、1949年の中華人民共和国の成立を契機とする。「孔氏北宗」の嫡長孫である孔徳成は、中華民国政府より1934年に奉祀官に任命された。日中戦争が激化し、曲阜が占領された1937年12月末には、国民政府に従い重慶に赴いた。その代理として曲阜の留守をまもり、先祖代々の墓を守った者が、現在家譜編纂の中心となっている孔徳墉の父孔令煜である。日中戦争は1945年に終結した。しかし、1949年、中華人民共和国が成立すると、孔徳成は国民政府に従い大陸を離れて台北に行き、中華民国の考試院院長（文部科学大臣）を務め、のち台湾大学教授となって現在に至っている(14)。したがって、「孔氏北宗」の宗家は台湾に移ったままで、大陸では姉の孔徳懋が、宗家を代表しているのである。蔣樂群の取材によれば、台湾の孔昭亮が台湾における第一代家譜を編纂したことに対して、孔徳懋が口授し、娘の柯蘭代が記した『孔府内宅旧事』(天津人民出版社、1983年）が出版された時、これを新しい「南北争権」と認識した者もいたという(15)。蔣樂群は孔徳墉を通じて、孔徳成が大陸を訪れる可能性の有無を尋ねてみた。孔徳墉は、かつて熱心に孔徳成に一緒に大陸へ行き祖先に参拝しようと説得したという。1980年代以降、中国は改革開放を進め、両岸交流が解禁となったからである。しかし、文化大革命により、孔徳成の父である第76代の衍聖公孔令貽の墓は、北京から来た紅衛兵によって暴かれ、死罪に値する大地主と呼ばれた、という。これは孔徳成にとって、祖先に対するこれ以上のない恥辱であり、孔徳成は生ある限り再び大陸の土を踏まぬ、と誓っているというのである。一度目は合流し得た孔子の南北宗家であるが、二度目の合流は未だ機が熟していないようである。

(四)家譜編纂

「天下第一家」である孔子の子孫たちは、歴代家譜を編纂してきた。明代以来、孔氏の家譜である『孔子世家譜』は、「六十年に一回大規模に修訂し、三十年に一回小規模に修訂する」と定められた。しかし、『孔子世家譜』が大規模に修訂されたのは、明の天啓年間（1621～27年）、清の康熙年間（1662～1722年）と乾隆年間（1736～1795年）、そして1937年の四回だけである。1928年、孔府は国民政府に『孔子世家譜』修訂を申請し、同意の返書を得ると、生後百日で衍聖公の爵位を嗣いだ8歳の孔徳成が総裁とされた。資料収集に2年、編纂に7年を費やし、1937年に完成した家譜は、全部で79代、56万人の孔氏一族を記載した。清の康熙年間の家譜が２万人を、乾隆年間の家譜が10万人余りを記載することに比べると、規模の大きさが分かる。

この最後の修訂よりすでに60年以上が経過しているが、中華人民共和国の成立後には、家譜の編纂は困難であった。ところが、1987年9月、谷牧副総理と中国孔子基金会会長の匡亜明は、『孔子世家譜』の修譜を提案し、「孔徳成は台湾におり家譜の修訂ができない。孔子の家譜の修訂は伝統・文化の継承という問題である。2500年の歴史がもし共産党の手によって断絶されれば、共産党は歴史の罪人となってしまう」と語った。当時の曲阜市長である許伝俊もまた、孔子の家譜の修訂を希望していた。

こうした状況のなか、孔徳成のいとこにあたる孔徳墉[16]は、親戚22人と相談の上、台湾に赴いて孔徳成の意見を仰ぐことにした。最後の奉祀官となった孔徳成からの授権がなければ、越権行為になるためである。そこで、1996年10月、孔徳墉は台湾で孔徳成と面会し、その支持を得たうえで修譜の準備に取りかかった。はじめ孔徳成は、台湾にいる身としては、大陸における家譜修訂に参加する術はない、と続修協会主席への就任を固辞し続けていたという。しかし、孔徳墉が粘り強く説得を続けた結果、孔徳成は名義上のみ家譜の修訂へ参与するということで同意したのである。

今回の修訂は、これまでとは明確に異なる二つの特徴がある。第一は、女性を家譜に載せることである。第二は、外国に居住する孔氏の子孫も記載す

ることである。今回の修譜は2009年に完成の予定であるが、家譜全体で180万人、5000万字あまりとなるであろうと予想されている。完成後は書籍として出版するほか、デジタル化も進める。2000年９月には、家譜修訂のため、全国各地の孔子の子孫の代表約100人を曲阜に召集して会議を開き、資料収集・整理出版の方法を話し合い、家譜編集委員を選出するという。

同時に、孔徳墉は、孔子生誕2551年を記念した山東省曲阜市地方政府の主催する孔子の祭祀に参加するとのことであった。曲阜市地方政府は観光事業促進のため、1996年より孔子の祭祀を始めた。清明節に明末清初の長袍馬褂（旧時の礼服）を着て、牛・羊・豚の三つの生贄（太牢）を捧げる祭礼を行うのである。蔣樂群は、この祭祀の様子をカメラに収めながら、家譜編纂の動向を伝えることを中心に据えようと考えた。

（五）黄金の孔子像

国際儒学連合会の事務所でのこと。姜広輝は精巧なケースの中から金色に輝く孔子像を取り出した。1999年6月に、中国孔子基金会・国際儒学連合会などが共同して監修し、高さ27㎝、重さ300グラム、24Kの黄金の孔子像を作製した。その様子は、人民日報・光明日報などでも報道されたという。古来、孔子は、位牌と僅かな肖像画が残るだけで、その肖像には決定版がなかった。そこで、黄金の孔子像は、唐の呉道子の「孔子行教像」を基礎に作られることになった。

孔子を崇拝していた時代にも、孔子の塑像、まして黄金のそれはなかった。学問や道徳の聖人である孔子が黄金の像になることは、今日の拝金主義的な中国社会の一面をよく表現していると思われた。黄金の孔子像のほかに、黄金の『論語』もあるという[17]。日本円で100万円にもなる黄金の孔子像を買う人は、孔子に何を求めているのであろうか。一般の日本人の考えでは、孔子は道徳・学問の師であり、金ぴかの孔子には違和感しか抱くまい。ここに文化的差異や、中国社会の現段階、改革開放的社会主義市場経済の特色を表現できる可能性もあろう。市場経済で成功した上流階級の孔子像は、どのくら

い金ピカな成り金趣味なのであろうか。

(六)尼山と孔子子孫

孔子生誕の地は、曲阜の市街地にはなく、尼山郷夫子洞という農村にある。当地の老人によれば、尼山と呼ばれる小さな山の麓に、孔子が生まれたという伝説の残る石窟があるという。訪問客も稀であるため、観光地のような喧噪は無い。真っ暗な石窟内部には誰が放置したのか分からぬ線香とろうそくがあった。村には、小さな孔子廟があった。廟の清掃を担当する女性は、夫が孔子75代の子孫であるという。普通の農民にも孔子の子孫がいることに興味を持った蔣樂群は、取材を依頼した。

女性の家は、孔子廟から５分ほどのところにあり、そこで一人娘を紹介された。彼女は上海の専門学校の二年生で、夏休みに帰省しているのだという。彼女は、成績が優秀なため、最も人気のあるコンピュータ専科に移れることになっていた。ところが、父が病気がちであるため、お金のかかる上海での勉学をあきらめ、退学すべきか悩んでいた。蔣樂群は彼女の話しの中に、普通の農民として暮らしている孔子の子孫に残っている、子としての孝心を見いだした。孔子宗家の取材では得られなかったものである。経済的困難を克服するため、父母の負担を減らすため、彼女は自分の学業を放棄しようとしているのである。しばらくすると父親が帰宅した。朴訥な農民である。「娘は一番大切な宝だ。外に出て勉強をして、将来は良い婿を見つけて欲しい。いま娘は成績が良く、とても嬉しい」と言った。蔣樂群は娘に、両親と話し合いをするとき、立ち会わせて欲しいと告げた。彼女は、屈託なく笑って許してくれた。

現在、中国では教育費が非常に高く、日本以上に家計を圧迫している。そうした中でも、教育を重んじ、娘にアルバイトも許さず、借金をしてまでも専門学校に通わせている孔子の子孫。そうした両親の慈愛を受けた娘は、それに孝で応えようとする。ここには、暖かい家族の絆が残っているのである。

三、孔子を表現する

以上の孔子に関する（一）～（六）までの先行調査の中から、どの素材を使って何を表現するのか。それを定めることにより、孔子の表現方法は変わる。プロデューサーの岡崎泰・広瀬涼二と検討を重ねた結果、次の三つの話題から孔子を描くことになった。

第一は、(一) 国際儒学連合会と（二）聖陶学校とその生徒により、中国の中央政府・中国共産党の孔子に対する期待と、家族愛と孝を根底に置く孔子の思想を描くことにした。

中国政府は、社会主義・人権問題への欧米からの批判に対抗するため、新たなる国民統合の理念として孔子の思想を尊重する。北京大学張岱年教授の

孔子を神様とした封建時代は過去のものとなった。しかし同時に、文化大革命のような過激な孔子批判も終わるべきだ。これからは、孔子を科学的・客観的に研究する新しい孔子の時代がやってくるべきだと思う。

という、孔子の再評価を推進すべきとする言葉、及び聖陶学校の王志遠副校長の

新中国の英雄たちは確かに優秀な人物でしたが、いずれも毛沢東の戦士でした。もちろん、民族の危機に際しては、戦士が必要だったのです。しかし、今は平和と安定の時代に入りました。私達は中国の伝統の教育を復興して、子供の徳を養い、新しい時代のエリート、21世紀の君子の養成を目指しています。新時代の君子の養成です。

という、新しい君子の養成に果たす孔子思想の役割を重視する発言から、中国政府の意図を描くことができよう。そして、聖陶学校の生徒の祖母の

将来、この子の思想・道徳性・文化および教養は、きっと母親より良いものになると期待しています。

という言葉より、市場経済の中で失われつつある家族愛への回帰を表現することにした。

第二は、(四) 家譜編纂と（三）の地方政府の孔子祭祀により、孔子宗家の孔子を利用した金もうけと、地方政府の孔子を利用した村おこしを描くこ

とにした。

孔子の復興を機に、孔子宗家は失われた栄光を取り戻そうとしているのである。孔子宗家の孔徳墉の

> 孔子は神様ではないので、お線香もお供えものもいりません。我々は子孫として心をこめて、拝礼をして、孔子への敬意を示せれば、それでいいと思います。家譜づくりも決して封建主義の復活ではなく、世界でもっとも大きく、一番長く続いている家族の歴史を記録に残すためです。

という言葉を生かしながら、孔氏一族の家譜修訂と、孔子の子孫の帰郷、そして孔子生誕2551周年の祭典への参加を通して、孔子宗家や地方政府の孔子への期待の高さを表現していくのである。

第三は、(六)尼山と孔子子孫により、貧しい孔子の子孫に残る孝の実践を表現することにした。

孔子の子孫の娘の

> 私の父母は世界でもっとも良い、これ以上ない良い人です。毎回、家を離れて上海へ行くときには、涙が出そうになります。

という言葉を生かしながら、孔子の子孫に脈々と受け継がれる家族愛（孝）と教育の重視を描くのである。

こうして「よみがえる孔子、21世紀の中国の知恵」は、３つの物語の組み合わせにより構成されることになった。それぞれの物語に具体的な主人公がいる。しかし、本当の主人公は画面に１度も姿を見せることのない孔子である。孔子と孔子に思いをよせる人々の言行をまとめ、はるか2000年前に『論語』は成立した。そうした意味では、われわれの番組も、孔子と孔子への思いを綴った20世紀の『論語』なのである。

おわりに

1989年10月、孔子生誕2540年記念大会で、江沢民国家主席が世界の孔子研究者と会見して以来、孔子の思想は着実に復権を続けている。2003年には、三聯書店より蒋慶『政治儒学――当代儒学的転向、特質与発展』が出版され、

「儒家議会三院制」の憲政構想が提起された。儒教は政治における「発言権」奪回も試みているのである。また、2004年９月に、中国共産党十六届四中全会の「中共中央関于加強党的執政能力建設的決定」において、はじめて「社会主義調和社会の構築」という概念が完全なかたちで提起されたが、その中には、孔子を源とする多くの儒教思想が反映している。2006年の現在においても、胡錦濤国家主席は、「調和社会」を国の目標として掲げている。

こうした国家における儒教の復権を背景としながら、1996年より孔子祭祀が各地で相次いで復活している。2004年の孔子生誕2555周年の際には、中華人民共和国で最初となる国家による孔子の祭祀も行われた。2006年の2557周年記念では、中国大陸と台湾のあわせて2557人が共同祭祀を挙行し、その模様は中央電視台により全中国に放送された。孔子の復活は、中国各地に広がり、阻みがたい勢いとなっている。

こうしてみると、孔子の復活という社会現象を20世紀末にわれわれがドキュメンタリーとして保存したことは、中国社会の変貌期を捉えたという意味において大きな意義を有している。2000年に放映したＴＶ番組を今回改めて見つめ直した所以である。

《注》

(1) 渡邉義浩・蔣楽群「海外ドキュメンタリー番組制作における産学連携の研究―「「三国志」の子孫をさがせ」の制作を中心に」(『人文科学』11、2006年）は、「「三国志」の子孫をさがせ」の制作を通じて、産学連携のあり方を探ったものである。

(2) 孔子の祭祀については、黄道興「權力與信仰――孔廟祭祀制度的形成」(『大陸雑誌』86-5、1993年）が、唐代までの孔子廟祭祀の変遷の概略を論じている。浅野裕一『孔子神話――宗教としての儒教の形成』(岩波書店、1997年）には、孔子が歴代王朝より受けた王号の展開がまとめられている。

(3) 楠山春樹「衍聖公家の発端――褒成侯と殷紹嘉侯」(『斯文』100、1991年、『道家思想と道教』平河出版社、1992年に所収）を参照。

(4) 後漢における孔子廟祭祀については、渡邉義浩「中国古代における祭祀権――後

漢時代の孔子廟祭祀を中心に」(『北海道教育大学紀要』第一部B 社会科学編43-2、1993年、『後漢国家の支配と儒教』雄山閣出版、1995年に所収)。また、釋奠の具体像については、小林和彦「孔子廟と釋奠について——儒教の宗教性についての一考察」(『中国文学会紀要』16、1995年)を参照。

⑸ 儒教経典に見える理念としての釋奠に関しては、弥永貞三「古代の釋奠について」(坂本太郎博士古稀記念会(編)『続日本古代史論集』下巻、吉川弘文館、1972年)を参照。また、釋奠と義疏学との関係については、古勝隆一「釋奠礼と義疏学」(小南一郎(編)『中国の礼制と礼学』朋友書店、2001年)がある。

⑹ 松浦千春「釋奠儀礼についての覚え書き⑵魏・西晉の釋奠」(『一関工業高等専門学校研究紀要』37、2002年)を参照。

⑺ 唐代の釋奠については、中野昌代「唐代の釋奠について」(『史窓』58、2001年)を参照。

⑻ 宋代に王安石が孔子廟に配享されたことについては、井澤耕一「王安石の孔子廟配享と『三経新義』に関する一考察——王学の興隆と衰退」(『中国文学会紀要』23、2002年)を参照。

⑼ 明清時代にイエズス会士が見た釋奠については、矢沢利彦「孔子崇拝儀礼(釋奠)について」(『思想』792、1990年)を参照。また、『明史』に見える釋奠儀礼については、新海一「釋奠儀礼の一斑」(『国学院雑誌』91-10、1990年)を参照。

⑽ むろん、すべての人々が儒教の否定により近代を求めたわけではなく、梁漱溟のように儒教の中から近代を希求する者があったことについては、溝口雄三「もう一つの「五・四」」(『思想』870、1996年)を参照。

⑾ 国際儒学聯合会(編)『国際儒学研究』(人民出版社、第一輯は1995年)として、その研究成果は公表されている。

⑿ 孔子の家系については、李景明『家族世系』(遼海出版社、1999年)を参照。なお、これは、孔徳懋を主編者とする「孔子家族全書」の第二巻であり、このほか①家族春秋・③家規礼儀・④家族精英・⑤文物古迹・⑥詩詞詮釈・⑦家事本末・⑧典籍備覧が出版されている。

⒀ 孫聚友『家族精英』(遼海出版社、1999年)・李景明『家事本末』(遼海出版社、

1999年）を参照。

⒁　劉厚琴『家族春秋』（遼海出版社、1999年）を参照。

⒂　日本では、孔徳懋（口述）・柯蘭（筆記）、和田武司（訳）『孔子の末裔』（筑摩書房、1986年）として翻訳、出版された。また、1987年の第二版を翻訳した孔徳懋（口述）・柯蘭（筆記）、相川勝衛『孔家秘話――孔子七十七代の子孫が語る』（大修館書店、1989年）もある。

⒃　孔徳墉は、小学校一年より孔徳成と一緒に曲阜孔府で生活を始めた従弟である。1980年代に香港で貿易業に成功をおさめた。1998年10月、香港で孔子世家譜続修工作協会をつくり、それを基礎に1999年９月、曲阜で第一回各地続修家譜組織機構の連合会議を召集していた。

⒄　『広州日報』2005年12月13日Ａ二版によれば、48頁からなる純金製の『論語』が製作されたとのことである。